

口頭発表「ノンノンと一緒に —ウサギを学級で飼う実践—

長澤 仁志（担当 東京都獣医師会 益田矩之）



1 はじめに

2004年に行われた第1回学校飼育動物研究会に参加した時に、学校で動物を飼うことの意義や良さについて改めて考えさせられた。その当時は校内にチャボ、ウサギ、アヒル、クジャクなどが飼われており、飼育委員会（本校では愛育委員会という名称）の担当でもあった。2年生の担任で生活科における飼育の活動も行っていたが、アゲハチョウやギンヤンマ、グッピーなどで、積極的に校内の動物の活用を考えていなかった。

研究会後、獣医師の方との交流活動を行なうことができ、ウサギの抱き方やよりよい世話の仕方を教わった。そして、チャンスがあれば、教室内で哺乳類を飼う実践ができればと考えていた。

現2年2組では、昨年の1年の時からウサギを飼っている。少し前は、本校でもモルモットやハ



ムスターを飼っている学級があったが、現在では本学級のみである。その背景には、手間の大変さ、動物アレルギーの子どもの増加など様々な原因が考えられる。本学級でもウサギを飼う良さを感じつつ、様々な問題を克服してきた実践について述べていきたい。

2 「飼う」「飼わない」の学級会

(1) 初代ノリノリ

我が家では、ウサギを飼っている。3匹のうち、2匹は妻の勤め先の学校で生まれたウサギで、学校の飼育小屋の狭さなどの理由から引き取ったものである。それでもまだ生まれてしまい、生後1ヶ月くらいで引き取らざるをえなくなった4匹目が「ノリノリ」である。

飼い始めの提案は、「飼うのにちょうどよい大きさのかわいいウサギがいる」、「動物を飼う家庭が少なくなったので触る機会が少ないので、学校でも触れるようにしたい」とこと、「お試し期間の中でアレルギーがつらい子がいる場合はあきらめること」の話をした。39名のうち、哺乳類を飼っている家庭は2件であった。また、ネコの毛のアレルギーの子が2名いた。1週間ほどのお試し期間の末、学級内にウサギがいてもアレルギー症状が出なかっただため、「どうする？」と再度提案。飼うことを決定した。

ノリノリは真っ黒で、飼育小屋にいた体重4キロ強のウサギたちと違い、1年生にも手のひらサイズだったため、とてもかわいがられた。手のひらにのせたり、ひざにのせたりしてウサギの体温を感じるには十分だった。もう少し教室で慣れたら、希望の家庭に休日のお持ち帰りをしてもらう予定でいた。

残念ながら、ノリノリは寒さのために2週間ほどで死んでしまった。教室に少し慣れてきた時期で、それでお終いにしたくなかったので、別のウサギを飼うかの話し合いをした。

(2) ノンノン

2代目「ノンノン」は、品種のせいか、毛が長くふわふわしている。しかし、もとは雨の日にずぶぬれだった捨てウサギであった。

ノリノリの死後しばらく空けて、ノンノンを飼うことについて提案すると、ノリノリの死んでしまったことのショックから、「また死んじやうと



(3) 運動ケージ



嫌だ」という声が挙がった。しかし、「今度はもっと頑張って元気に過ごせるようにしたい」などと飼うことに賛成の意見が多くなったため、ノリノリに引き続き学級でウサギを飼育することが決定した。ノンノンは手を出してもかまないこと、なでられてもおとなしくしていることなど、性格にも恵まれた。本学級以外の子どもたちもなでに来る人気者である。

3 学校での生活と休日の「お持ち帰り」

(1) 教室にて

本校低学年棟は、オープン教室である。飼い始めの小さな頃は、オープンにケージを用意し、ずっと室内で飼っていた。その後、大きくなり、給食の配膳に不都合が出てきたため、ベランダそばの窓際に移動。日常はベランダで過ごさせ、児童下校後は教室内に入れることにした。毛の生え替わる時期には、掃除やアレルギーの子から少し遠ざけるのにも都合が良かった。

(2) 用意した物品

ケージ 60cm アイリス社製

新聞紙 足りなくなると「朝刊一つ分」の指示
で家庭に協力依頼。

えさ入れ ハードタイプのえさ。

水入れ ボトル式のもの。

かじり木

トイレ おから素材のネコ用トイレ砂

バスタオル 觸れ合う際に膝にしく。

紙ガムテープ 児童の服ついた毛をとるための
もの

キャリーバッグ

その後、ノンノンが子どもを産んだ時、ある家庭から使わなくなった毛布を譲っていただき、保温用に使用した。

学年の先生から、犬用の運動ケージを譲っていた。これにより、ノンノンとの触れあいスペースとなった。また、適度な広さがあるため運動することもできる。100×120×60cmの大きさである。

<メリット>

- ・ウサギと触れ合いやすい。
- ・動き回る様子を見られる。



<デメリット>

- ・オープンスペースといえど、場所をとる。
(現在はたたんでいる)
- ・おしっこをトイレにしなかった。
- ・周りの家具(本棚など)におしっこが飛び散る。

(4) 休日のお世話

休日の世話を家庭に分担してもらうように「お持ち帰り」を設定した。

犬用のキャリーバッグを購入し、学級通信で希望を募る。連絡帳で調整した希望者にお持ち帰りをしてもらう。今までに8名が経験をした。開始頃のご家庭には、休日にどう過ごしたかのレポート



トを出して頂いた。それを学級通信に掲載し、次のご家庭への参考としてもらった。そのうち、ノンノンの子どもが生まれた時の里親として3名が決定した。

(5)お持ち帰りレポートの例

① Hさん宅



Hさんのご家庭には、デジタルカメラで様子を撮影してもらった。衣装ケースで小屋を作り、テーブルで飼育スペースを確保する工夫をなさっていた。

② Tさん宅

Tさんのご家庭は、ダンボールとレジャーシートで作成。隠れ家を工夫してそこが気に入った様子をレポートしていただいた。

お持ち帰りの希望がない場合は、私が持ち帰るか、休日の教室にえさをやりに行くかした。

4 活躍！いきものがかり

平成18年度2学期、5名の生き物係の子どもが自動的に当番を決め、曜日ごとにお世話をしている。子どもたちによると、大変なトイレの掃除が登校時間の差により、だれかに偏るようになった

ノンノンお預かりレポート

11日(金)～13日(月)朝まで預かりました。

おうち：ダンボール箱を利用して作り、中に新聞紙をひきました。ダンボール箱の下にはレジャーシートをひきました。小さい箱を机に倒して入れて隠れ場所を作ったところ、大変気に入った様子でした。出かける時や夜は布で覆いをしておけば、飛び出すことはありませんでした。小さい箱の上に飛び乗ったり、広いほうの箱の中を駆け回って遊ぶこともましたが、じっと静かにしている時間もありました。

えさ：キャベツの葉が大好物のようです。

感想：たくさんかわいい表情をみせてくくれて、楽しかったです。例えば、C Dの音に反応して後ろ足でたちあがり、じっと耳をそばだてる。お腹がいっぱいになって蛍光して寝そべる、丁寧に毛づくろいをするなど。良いも心配していたほどではなく、おっしつこやうんちの世話をも比較的楽でした。



ので、話し合いをしたそうである。自由帳に当番表を作り、みんなが大変な仕事に当たり、いつでも助けにいけるような体制づくりを子どもたち自身で作り上げていた。

生き物係は、朝登校すると、ケージをベランダに運び、トイレを掃除し、トイレ砂と新聞紙を交換、えさと水をやる。

下校時にはこの反対の作業でケージを室内に戻し、えさと水の確認をしてから帰るのである。確認の作業は、日直とも連係させるようにした。

生き物係はこれまでにのべ11名の子がウサギの世話を経験した。うち2名が後に産まれてくるこ



となるノンノンの子どもの里親となった。

(1) 掃除用水道の確保

1年の時は、排水溝が教室から出てすぐのところのあったので、掃除が簡単だった。

現在は、グラウンド水道にホースを設置し、そこまで掃除に行かせるようにした。水道の排水溝に糞が落ちていないようにこまめにチェックをしている。

(2) ゴミ箱の設置

糞や新聞紙は教室外のベランダにゴミ箱を置き、そこに捨てさせた。ゴミ箱が遠くなり、ゴミ減量にも役に立ったのではないかと思われる。



係の仕事の最後は、制服の毛取りである。

5 ノンノンと一緒に活動あれこれ

(1) 作文 … S君のクラス紹介の作文より

「ノンノンは授業中はしづかにしていて、休み時間になるとさわぎます。まるでいっしょに勉強しているみたいです。ノンノンはみんなに愛されています。だからみんなの気持ちが一つになります。」

(2) 図工 … 生き物の絵画にて

黄ボール紙にクレパスで形をとり、その中だけ



水彩絵の具で着色する。最後に落款のようにサインを入れると、日本画風の絵画のできあがり。4時間(45分×4)扱い。

(3) カウンセリング



ノンノンは、いるだけで癒される。友達関係でつまずいている子の相談相手にもなった。子どもたちは「ノンノン遊び」と言っている。

もちろん遊んだ後は、石鹼で手を洗わせる。

6 3年生になると

3年生になると、校舎が移り教室がオープンスペースではなくなる。今のところ、ノンノンは希望のご家庭にひきとつてもらう予定である。

7 近況と成果と課題

ノンノンの飼育中に、妻の勤務先の飼育小屋は環境が良くなり、避妊手術を受けるなどの管理飼育もされるようになって引き取ることがなくなった。また、かつていたウサギたちは、HPを通して近隣の学校等に移っていたそうである。

ノンノンは、平成18年3月に6匹の子どもを産み、うち3匹が希望の子どもの家に引き取られ、うち2匹が未だ健在である。

教室でウサギを飼うことを通して、学級経営の一つの柱とすることができた。また、子どもたちはウサギ好きの優しい気持ちの持ち主が多くなったと感じている。

今後、本校生活科のカリキュラムにおいて、ウサギなどの飼育をどう定着させるかが課題である。1、2年合わせての8学級のうち一つでも日常的な飼育の実践ができればいいと思う。

教室内でウサギを飼うという取り組みに対しての見通しがもてたことが最大の成果であった。

(東京学芸大学附属小金井小学校教諭)